

巻頭言

ことばと比較文化

比較文化学科長 伊藤 健人

いよいよ「秋学期」が始まります。秋晴れの澄んだ青空の日にこの巻頭言を書いています。秋は長雨の季節でもあります。秋雨前線が停滞し、梅雨と同じように雨が降り続きます。「秋の長雨」に限らず、日本語では「雨」に関係する表現がたくさんあります。倉嶋厚・原田稔氏の『雨のことば辞典』（講談社学術文庫）には、雨に関係することばが1,200語も収録されています。例えば、「にわか雨、通り雨、夕立、時雨（しぐれ）、天気雨、霧雨」などの日常的によく使う表現から、「氷雨（ひさめ）、狐の嫁入り、こぬか雨、土用雨（どようあめ）」など意味がうまく説明できるかちょっと不安なもの、さらに、「地雨（じあめ）、村雨／群雨（むらさめ）、外待雨（ほまちあめ）、卯の花腐し（うのはなくたし）」など馴染みのないものまで掲載されています。

「夕立」と日本文化的なものの見方

それらを注意深く観察してみると、これら多くのことばは、「雨」の持つ多様な側面のどこに注目しているかという「見方」で整理することができます。代表的な見方は、雨粒の大きさ、雨量、強さ・激しさなどの雨そのものに注目するもの、雨の降り出し方、降る期間、時間帯、時期・季節等の時に注目するもの、雨と風・雪・雲・晴れとの関わりに注目するもの、そして、その雨をもたらす影響に注目するものなどです。さらに、これらの見方が複合的に用いられることも少なくありません。例えば、「にわか雨（急に降りだし、短時間で止む雨。同辞典 p.171）」は、「降り出し方（急に降りだし）、+期間（短時間で止む）」の2つの複合と言えます。さらに、「夕立（夏の夕方、突然激しく降ってくる雨。同辞典 p.214）」は、「季節（夏）+時間帯（夕方）+降り出し方（突然）+強さ・激しさ（激しく）」の4つが複合的に用いられています。

日本語は、なぜこれほどに「雨」マニアなのでしょう。ひとつには、四季の移り変わりによって様々に変化する「雨」は、農作物の育成など日常生活を営んでいく上で欠かせないものであるだけでなく、時には災害をもたらす恐ろしいものであるため、注意深く観察し、それらをことばとして言い分ける必要があったからだと考えられます。この考え方が妥当かどうかを検証するには、日本と同様に季節ごとの気候の変化があり、雨の多い国・地域で主に農耕生活をしていた人々が用いる言語と比較する必要があります。このようにいくつかの観点を定めて、複数の文化を比較し、その共通点と相違点について考えることは、比較文化学科らしい面白い研究テーマだと言えます。

「大きい／小さい」と日本語的なものの見方

さて、先の『雨のことば辞典』には、「雨の強さ」のコラム（p.68-69）があり、『改訂版 NHK 気象ハンドブック』（NHK 放送文化研究所）の「雨の強さ」を表す表現が紹介されています。それによると「小雨」から「猛烈な雨」まで、以下のような順序で強さが表されています。

【小雨<弱い雨<雨<やや強い雨<強い雨<激しい雨<非常に激しい雨<猛烈な雨】

ここで興味深いのは、「雨」が「小さい、強い／弱い、激しい」などの概念で捉えられていることです。試みに、「大きい／小さい」、「強い／弱い」、「高い／低い」という形容詞と気象・災害に関わる11のことばとの共起関係を見てみると以下ようになります（○は共起すること、×は共起しにくいこ

と、△は共起するものの実例が少ないことを表します)。

形容詞と気象・災害のことばとの共起関係

	雨	雪	風	日差し	雷	気温	湿度	気圧	台風	地震	波
大きい	×	×	×	×	○	×	×	×	○	○	○
小さい	×	×	×	×	△	×	×	×	○	○	○
強い	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○
弱い	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○
高い	×	×	×	×	×	○	○	○	×	×	○
低い	×	×	×	×	×	○	○	○	×	×	○

形容詞と気象・災害のことばとの共起関係

この表からわかるように、「強い／弱い」は8つの気象・災害のことばと共起します。「雨・雪」の降り方、「風」の吹き方、「日差し」をもたらす太陽の照り方が「強い／弱い」と捉えられるためだと考えられます。一方、「雷・台風・地震・波」は、「強い／弱い」だけでなく「大きい／小さい」とも共起します。気象庁のサイトでは、「台風の大きさと強さ」についての説明がありますが、それによると台風の「強い／弱い」は「最大風力」を表し、台風の「大きい／小さい」は「強風の範囲」を表しているとのこと。しかし、「地震」の「大きさ」と「強さ」については明確に説明されていません。その違いを考えるには、「波」との共起関係が役立ちます。「波」は、ゆれ幅が「大きい／小さい」、威力が「強い／弱い」、高さが「高い／低い」のようにすべてと共起します。これをヒントに考えると、「地震」もゆれ幅が「大きい／小さい」と捉えられ、威力が「強い／弱い」と捉えられるのではないかと考えられます。

「重い／heavy」と比較文化

再び形容詞に目を向けると、「大きい／小さい」が用いられるのは気象・災害ではありません。「カメラ・自転車・部屋・公園」のような具体的な物や空間と共起し、「集まり・会社・国」のような団体・組織等とも共起します。さらに抽象度が高い「影響・問題・夢・幸せ」等とも共起します。これに対し、「強い／弱い」は、「会社・国・影響」としか共起しませんが、「大きい／小さい」が共起できない「印象・信念・願い・意志」等と共起します。これらの違いを考えていくことで、「大きい／小さい」と「強い／弱い」がものごとのどの側面を捉えているかがわかってきます。

このような単純そうなことばが複雑な概念と結びつくのは、日本語だけではなく、他の言語にも広範に見られます。例えば、英語を母語や使用言語とする日本語学習者には「重い雨」という誤用がしばしば見られますが、これはおそらく「heavy rain」を直訳したものの思われます。日本語教育的にはこの誤用は訂正すべきものですが、言語学的には、上で見てきたようなものごとの捉え方が言語によって異なるという非常に面白いデータとなります。英語の「heavy」は「heavy bag (重いバッグ)」のような具体的・物理的な表現では日本語の「重い」と共通しますが、先ほどの「heavy rain (強い雨・大雨)」以外にも「heavy sleep (深い眠り)」、「heavy hand (手先が不器用)」等の日本語と発想が異なる表現もあります。簡単そうに見える「重い／heavy」のような語との共起関係から日本語と英語のものごとの見方を探ることができます。そして、その見方や発想法は文化的な側面と関わっているはずなので、身近なことばの比較から文化の比較を考えることができます。これも比較文化学科らしい研究テーマです。

秋の夜長に

最後に。みなさんは「ちいさい秋みつけた」という童謡を知っていますか。小さい頃に歌ったことがありますか。この「小さい秋」の「小さい」とはどういう意味でしょうか。「小さい頃」の「小さい」とどう違うのでしょうか。さらに、「小さい秋」の「秋」とは具体的にどんなことを指すのでしょうか。「大きい秋みつけた」と言いにくいのはなぜでしょうか。・・・いろいろと疑問がわいてきますね。これらを秋の夜長に考えてみて下さい。そして、よい分析ができたなら、ぜひ教えて下さい。気長に待っています。

ゼミ連インタビュー

今回は、キリスト教教育をご担当の高井啓介先生と、今年度、新たに着任され韓国・朝鮮文化を担当されている呉世蓮（オ・セヨン）先生に、比較文化学科の学生がインタビューしました。ご研究の内容、私生活、学生の皆さんへのメッセージなど、色々とお話をいただいています。

高井啓介先生に聞く

1. 何の研究をされていますか？

宗教全般、とくにキリスト教、そのなかでも主に旧約聖書の研究をしています。キリスト教の教えの基礎となっている聖書は、もともとユダヤ教の聖書であったのでヘブライ語（アラビア語と親戚の言語）で書かれています。この言語から勉強して、聖書の内容を理解するのが第一。そして第二に、聖書に書かれていることが現代にどう受け継がれているかについても研究しています。

紀元前に書かれた聖書は様々な時代、国で訳されており、それらが元来の意味を受け継いでいるかを調べ、聖書の時代とそれを取り巻く時代における様々なトピックを調べています。わかりやすい例では、聖書に出てくる降霊術師の女性と、近代ヨーロッパに登場し

た魔女がなぜつながらずのか、3mを超える巨人（その他ファンタジーに登場するようないろんな怪物）がなぜ聖書に出てくるのか、といったことです。また、聖書に登場する人物や概念が時代ごとにどのように解釈されて、現代につながっているかについても研究を重ねています。要するに、ヘブライ語を勉強して旧約聖書を読み、各時代の翻訳を読んで、現代への繋がりや現代人がどう解釈しているかを学び続けています。



2. 休日はどのように過ごされていますか？

休日は基本家事をしています。平日は忙しく、溜まった家事を片付けて終わってしまいます。平日は基本5限まで大学にいて家に帰りますが、オンライン授業を4つ受け持っているので、こなしていくのがとても大変です。過去に作成したスライドに新たな音声吹き込み、課題を変え、動画にして、コースコンテンツを更新し、フィードバックを次回の資料に載せる。この一連の作業で平日が終わってしまうので、部屋の中がぐしゃぐしゃになってしまいます。そういった作業をしているうちに気が付いたら眠くなって（ときには寝

落ちして）寝てしまう、そんな毎日ですね。

だから休日は平日にできなかった片づけをするので精いっぱいです。たまに出かけることもあります。こちらでは一人暮らしですし、先生たちとどこかに行くこともないので、暇があれば韓国ドラマを見ています（笑）。後はダイエットをしなければならないので、ご飯は自炊して、野菜を多めに摂るようにしています。ちなみに自炊を始めたのは、留学先の寮のご飯が不味すぎてアパートに引っ越して自分で作るようになったのがきっかけです（笑）。

3. なぜ教員になったのですか？

自分の研究を続けたかったからです。大学の教員は、同時に研究者でもあります。いわゆる文系の研究者の場合、大学院で自分の卒論のテーマを発展させて、修士論文、博士論文を書き、その後も研究をずっと続けていくためには、大学に就職するしか道がありません。理系は企業の研究・開発部門に就職する道があります

が、文系にそれはないので、研究論文をたくさん書いて、それを教員募集の出た大学に送ります。そうして、この大学に選ばれました。（学生註：その論文（博士論文ですね（高井註））を実際に見せていただきましたが、すべて英語で、本一冊はとうに超えるような紙の量でした。）

4. なぜキリスト教を研究しているのですか？

父親がプロテスタント系の教会の牧師だったからです。生まれ落ちたところがキリスト教の世界でした。キリスト教が家業としてありました。受け継ぐ必要は

なかったのですが、両親の手伝いをしていく中で、支えたい思いが、キリスト教と聖書に対する興味を広げていきました。

5. 学生のうちにした方がいいことはありますか？

恋愛以外にあるのだろうか！？学生時代はやっぱり恋愛以外ない！！とにかく学生のうちは、失敗できるので色々な恋愛をして欲しいです。男性・女性、同性

同士とか色々な恋愛があるけれど、誰かを好きになって真剣に関わって、学生ならではの恋愛をして欲しい。大人になったらある程度将来のことを考えなければな

らないので、学生のうちはあまり考えずに好きになって、楽しいことを共有していい恋愛をすると将来にも繋がると思います。

もちろん勉強も大切だけど、心が締め付けられるような恋愛や失敗をして、人を愛することや愛されること、幸せな気持ち、すごく辛い気持ちから人生を学んで欲しいです。それらも過去になれば、いい経験だっ

6. 退職後は何をしたいですか？

筋トレをしてボディービル大会に出場したいかな？一時期ゴールドジムに本格的に通っていたんですよ。でも、こっちに来てから仕事が忙しくて行けてないので、少しずつ身体作りをして、退職後にシニアの大会に出られるようにウェイトトレーニングをしたいな（笑）。

たと思えますよ。だから素敵な恋愛をして欲しい！僕も学生時代は、当時の彼女とクリスマスイブに赤いカローラレビンで大学にある安田講堂前に乗りつけてワイン代わりにコーラで乾杯をしたりしました。今となっては恥ずかしい思い出ですが楽しかったなあ。それはそうとあのときどうやってあそこまで車でのりつけたのだろう（笑）。

あとは、神奈川の海の側に住みたいかな？友達にサーファーがいるので、サーフィンは何度かやったことあるんですよ。まだ1回も立てないんですけどね（笑）。あとゼミ生にもサーファーが何人かいます。だから、体を鍛えた上でサーフィンをしたいかな。あと、歴代のゼミ生を招いてみんなでBBQをしたい！！

呉世蓮先生に聞く

1. どんな研究をされているのですか。

私の研究は、「日本と韓国における多文化教育の比較研究」です。きっかけは、多文化教育というといわゆる社会的弱者の人たちを対象とした教育支援なんですけど、私は社会教育・生涯学習から捉えているんですね。そしてその社会的弱者と言っても私の場合は、外国籍などの外国につながる人々への教育支援を捉えているんですが、学校外での教育活動とはどういった教育があるのかを捉えている訳なんです。日本と韓国の比較研究なんですけど、自分自身が小さい頃からよく日本のことに触れ合えるような環境でもありましたし、日本（文化）との出会いが多かったっていうのも一つ言えるんですが、日本の大学に留学生として来ることがきっかけで、日本の社会教育・生涯学習の中で外国人支援というのは何があるんだろう、とかそういう漠然とした疑問がありました。そして、韓国での経験も含めて、自分自身が日本にいる外国人という立場から日本と韓国における外国人・外国につながる人々への教育支援の比較研究がしたいということも理由としてありました。

現在、このような研究をしていますけど、実際は自分自身の母親のお母さん（学生註：呉先生にとっての祖母）が四国の高知県出身という日本のつながりを持っているし、父親は以前からグローバルな企業で働いて日本人の友人がたくさんいて、日本人と触れ合う機会が幼い頃から多くあったんですね。そして祖母は日本語が上手な方なんです。まあもちろん日本生まれ、日本育ちで、結婚を機に韓国へ渡って来たので。

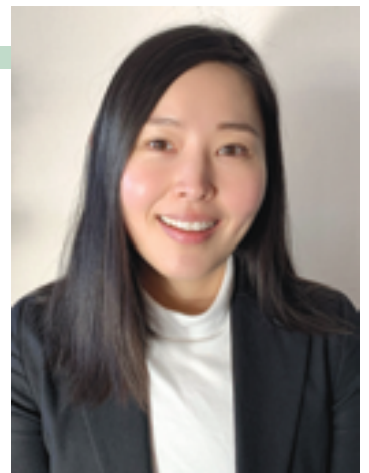
2. 先生が授業をするときに難しかったり、心配だと思うことはありますか。

私はまだ関東学院大学に来て四ヶ月しか経っていないんですけども（学生註：インタビュー時は7月上旬）、授業を準備する上で心配というのは特になのですが、学生たちがどこからどこまで理解できているのかというのは心配…。でも、理解できているか出来ていない

なのでおぼつかない韓国語を話す祖母のことを、私の母は嫌だったらしいです。まあそれは韓国の閉鎖的な、社会的に見ても自分と異なるものを排除したがるというような、社会的な背景がものすごく根付いていたのではないかなと思うんですね。

それに加えて、私は韓国の光州っていう地域で生まれ育ったんですが、そこは民主化運動が起こった場所で民主主義というのはなんなんだろうっていうのを小さい頃から（小学校・中学校などで）、よく社会科の先生に教わっていたわけなんです。学校外での教育現場でそういう民主化運動について、勉強・学習したり博物館や社会教育施設などに行ったりするうちに、漠然と何だろうというような疑問を抱きました。私が日本に来るきっかけというの、学校外での教育ってなんだろうとか、社会教育ってなんだろうという思いです。社会教育っていうのは学校教育とは異なる専門である訳なんです。なのでそこから日本で社会教育について勉強したいなという強い思いがあり、日本に渡って来ました。私は大学一年生の時から興味関心のあった分野を今まで続けてずっと自分の研究テーマとしてやっています。

かというのが心配というより、理解してもらえるように準備しようというふうに励んでいます。なので、今100分授業ですが、この時間内で全部話したこと（授業内容）を忘れてもいいので、この授業でのキーワードを一つだけ覚えてほしいなと思いつつ、毎回授業に



臨んでいます。他には、どうすれば学生たちが寝ないか。寝かせないようにしようという意識はあって…。でも私も自分の声が低いから、自分の声でだんだん眠くなる時があるので、だからまあ、そりゃあ学生も眠くなるんだろうなというふうには思いながらも(笑)、今日の授業でのキーワードだけは覚えて帰ってほしいなと思ってそこばかり、アピールするときもあります。

——今まで寝てる学生はいましたか。

寝てる学生はやっぱりいますね。でも私最初の授業でいつも話しているんですけど、「眠くても堂々とは寝

ないで、寝てませんけどっていう風な、寝ないふりして寝てください。」というのと、「携帯見たくても、携帯見てませんけどっていうふりして携帯見てくださいね。」って言うてるので、みんなちゃんと守ってくれてる。寝てるんだけど寝てないふりしながら寝てるというふうな、携帯いじってるけどいじってないよっていうふりしながら携帯いじってる子がいるので、今のところみんなちゃんと守ってくれてるなって感じ。なんか素直、うち(関東学院大学)の学生、みんな素直。(笑)

3. 職業柄知らない人と話すことや、発表の機会が多いと思いますが、緊張はしますか。また緊張を緩和させる方法などありますか。

緊張します。緊張しない人っているんですかね。私は普通の人より何倍も緊張するタイプだと思うんですね。で、いざとなると緊張してないようによく見られますが…。物事に対して真剣に向き合っていて取り組んでいるから緊張すると思うんですね。なんでも真剣にやってしまうというタイプなので、だからこそ緊張しちゃうんじゃないかと思います。他の人も緊張する人は物事を真剣に取り組むからみんな緊張しちゃうと思うんですが、緊張をほぐすにはやっぱり深呼吸、深く深呼吸するしか無いですね。それで真剣に始めてしまえばすぐ終わるんじゃないかと思うんです。

私が小さい頃から親に言われたのは目の前にいる人がみんなカボチャだと思えばいいんだと、かぼちゃ畑ね。かぼちゃ畑だと思えば大丈夫だって、小さい頃からよく言われていた訳なんですけど、今は、目が悪いん

ですが、メガネかけずにわざと裸眼で…(笑)。あんまり緊張しないようにはするんですけど、まあでも物事って全部慣れれば緊張しなくなるので、慣らしちゃえばいいって思います。

——人生で1番緊張した体験は何ですか。

日本の大学に入る受験の面接の時に一番緊張したんじゃないかと思うんですよ。「ありがとうございます。」って言って、お辞儀したときに緊張しすぎて自分が巻いていたマフラーに引っかかって先生の前で転けてしまって。でもその面接の先生に覚えてもらった(笑)。わざとじゃないんですけど、思いっきりもう豪快に倒れてしまって。それが一番緊張したかかもしれないですね、人生最大。生まれて初めての面接で、第二外国語(日本語)で、高校3年生として1人で日本に来た時の話なので、17歳…。かわいいねえ(笑)。

4. 韓国と日本の学校で、授業の雰囲気の違いはありますか。

何があるんだろう。日本の大学のはのびのびと好きなことをしているイメージがあるんですけど、韓国の大学は好きなことができるとしてもやっぱり、就職・就活に関わることをやる人が多くて、留学やTOEFLやTOEICの試験など業績を作らないといけないというイメージで、頑張りすぎている友達が多かったというイメージですね。自分は日本の大学しか行ってないので比較はできないんですけど、友達とかから聞くと、4年で卒業するというより、5年とかで間に一年の留学とかを挟んだり、休学は韓国では当たり前風潮になっているので、わざわざ休学して公務員試験の準備をしたり。高校生の時一ヶ月くらいユネスコを通して

横浜にある捜真女子高校に行ったことがあるのですが、私も韓国では女子高校で、一概には説明できないと思うのですが、雰囲気は一緒でした。

日本の高校の制服と韓国の制服は違いますね。学校によって違いますからね。うちは結構熱い子が多くて、これは地元の特徴なのか、たまたま私の代の子がおもしろおかしい子ばかりだったのかわからないんですけど、普通制服は女子はスカートじゃないですか。で、スカート反対っていう運動をしだして、ズボンがその代で出来ました。他の地域や学校にも影響を与えました。おそらく韓国の学校の中では最初の取り組みだったと思います。私が知っている限りは。

5. 韓国と日本それぞれの好きな食べ物はなんですか。

日本で好きな食べ物は、寿司です。だけど、一応寿司と言っておいたけど、一番好きなのは鶏肉なので、焼き鳥、焼き鳥大好き。私は牛より豚が好きで、豚より鳥が好きです。

韓国で好きな食べ物は、とり肉繋がりではヤンニョムチキンなんですけど、本当の一番好きなのは母親の手作りキムチです。母は料理がすごい上手で。キムチの味は地域でも家庭でも違いますし。うちの母のキムチは、韓国の南の方のキムチなのでいろんな食材が

入ってますね、牡蠣とか甘みを出すための梨とか。南の方が味付けが濃くてあんまり日本では食べられないですね。特に私の地元の場合は海も近いし山もあるし、畑もあるので食材に関しては他の地域より豊富で、味付けがちょっと違いますね。濃いっていうのは日本の塩味とかのしょっぱ味ではなく。韓国の北の方に行けば行くほどキムチがみずっぽくシャキッとさせて、それはそれで美味しいんですけど、南の方は食材の豊富さの味の濃さがあります。

日本文化探訪参加記

2022年度「日本文化探訪」のテーマは「お江戸文学散歩」。都内にある江戸文学ゆかりの地を訪ねました。コースの目玉は全生庵で開催中の幽霊画展。くわえて、折よく東洋文庫ミュージアムで「日本語の歴史」展が開催中と知り見学、貴重な典籍を見ることができました。
(本学科教員 井上 和人)

比較文化学科2年 新井 楓

今回の「日本文化探訪」で一番印象に残っているのは全生庵の幽霊画展です。この幽霊画展は初代三遊亭圓朝が収集していた幽霊画が東京の台東区にある全生庵で展示されており、毎年三遊亭圓朝の命日の8月に公開されています。初代圓朝は幕末から明治に活躍し、様々な名作落語を生み出しました。その演目らは現在でも愛され文庫化や映画化もされています。

幽霊画をいままで見たことがなく、幽霊というのも意識したことがありませんでした。それまで幽霊のイメージは顔が青白く、存在感がなく、白い着物を着ているというイメージがありました。しかし、実際に見たことも感じたこともなかったので、ただの恐ろしい幻想に過ぎないのではないかとも思っていました。

今回の幽霊画展では様々な幽霊をみることができました。綺麗な着物を着ていても表情は感情を感じないほど白々とした幽霊画、血だらけの生首を持っている女性の幽霊画、骨と皮だけの痩せ衰えた、かつては美しかったであろう女郎、鬼のような形相の女性の幽霊画など、他にも印象に残った絵はたくさんありました。

しかし、どの幽霊画も共通していたのは、たとえどんな様子が描かれようと、日常に繊細な筆づかいで細部まで気をかけた美しい絵であることでした。着物や花に描かれた色はとても美しく塗られており、幽霊の存在を引き立たせていました。色がない作品であっても、まるで色が塗られているかのような繊細な表現が施され、非常に美しいものでした。また、顔にはより立体的に見える影や、鼻の描き方など、日本独特の絵の特徴を持った絵というよりはヨーロッパや西洋の絵画に近いような表現もおおく施されており、当時の日本社会を反映しているのではないかと感じられる作品も数多くありました。

本当に幽霊が存在するのか証明はできませんが、たとえ存在していても、幽霊は恐ろしくも美しい存在として人々に受け入れられていたのではないかと感じました。



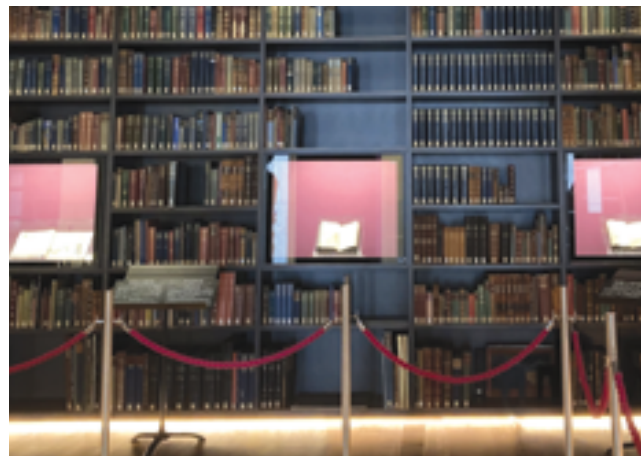
全生庵

比較文化学科2年 今井 菜那

今回の「日本文化探訪」で、特に記憶に残っている場所は、全生庵の幽霊画展と東洋文庫ミュージアムです。まず、全生庵の幽霊画展では、多くの幽霊画コレクションを見ることができました。一つの部屋に沢山の種類の幽霊画が飾られていました。幽霊画と聞いたとき、恐ろしい幽霊や妖怪の作品しかないのだと思っていました。ですが、実際見てみると様々な種類の幽霊画があり、怖くて恐ろしい顔をした幽霊や妖怪といった絵画はかなりの迫力がありました。ですが、幽霊画だと聞かなければわからないほど普通の人のような幽霊画もあり驚きました。ほかの幽霊画も目を引くものばかりでした。幽霊画というものを実際に見たのが初めてだったので貴重な経験になりました。

東洋文庫ミュージアムでは、様々な歴史的なものを見て学ぶことができました。建物内はとても広く、特にモリソン書庫というエリアでは、天井近くまでたくさんの本が並んでいて日本にはない雰囲気を実際に見ることができました。この東洋文庫ミュージアムの中で印象的だったものは、限定で展示されている「日本語の歴史」展です。『人間失格』や『吾輩は猫である』、『金閣寺』や『四谷怪談』といった作品が歴史などとともに展示されていて、とても興味深かったです。展示されている場所に向かう道が暗くなっていてクレバスがあるかようになっていたところがあったり、またほかに展示されているものも、どれも一つ一つにしっかりと説明がありました。ですが、その説明文も長すぎず簡潔にまとめられていて、とても見やすくなっていました。

これら以外に「日本文化探訪」でお寺やその物語などを学習したり、実際にその場所に行って学ぶことで、知らなかったことを多く知ることができ、歴史をしっかりと実感することができました。「日本文化探訪」では、全体を通してとても良い経験ができたと思います。



東洋文庫モリソン書庫

集中講義「外から見た日本1」

本学科教員 鄧 捷

夏の集中講義「外から見た日本1」は8月2日(火)～6日(土)にオンライン形式で開催されました。授業を担当したのは韓信大学の河棕文先生です。河先生は日本史と日韓関係史を専門とし、歴史教科書問題や日本軍「慰安婦」問題をはじめとする日韓関係の懸案や争点に関する研究と活動に携わっています。今回の講義は「日韓教科書の比較」「原爆投下の是非」「映画化された歴史の是非」「慰安婦問題」「ジェンダーから見た日韓」「米軍基地と日米・アジア」「『在日』と日本・韓国」などをテーマにしています。学生たちに日本を見る複眼的な視線を養ってもらうため、なるべく生の声に着眼して日韓両方の異なる立場と論理をバランスよく伝えるとともに、「違い」をのりこえる思考力の大切さに気付かせるように努める、というのは河先生の狙いです。

授業を終えた後、私のところに河先生からメールが届きました。一節を引用します。

今回は、とっさの思い付きからでしたが、新しい取り組みを試みました。初日の火曜日に学生たちの賛成を得、水曜日から土曜日の最終時間には、韓信大学の学生たちの参加した共同授業を行いました。毎回テーマ（例えば、水曜は「コロナと大学生活」）を決めて、自由に意見交換をしました。初日からインスタグラムのIDを交換する学生も出て、わいわいとした雰囲気になりました。最後に感想を述べてもらったら、私の授業より共同授業が楽しかったと、口をそろえて言ってくれました。

以上の報告を兼ねてお願いがあります。日韓両方の学生は今後オンラインでの共同授業があればいいと言っておりました。来学期には間に合わないかも知れませんが、来年からはオンラインでの共同授業を試してみませんか。よろしくご検討いただきたく存じます。

思いがけない嬉しい提案です。コロナでたくさん悩まされましたが、オンラインで簡単に国境を越えて共同授業を行うことができます。国境を越えた共同授業は、是非実現できるように、これからはいろいろと試みたいです。



オープンキャンパス参加記

2022年8月6日・7日の2日間、金沢八景キャンパスでオープンキャンパスが行われました。この行事内の企画として、比較文化学科では在学生による「個別相談会」を実施しました。今回、この企画に参加した2年生2名に、来場者からの質問に対応した感想を書いてもらいました。 (本学科教員 小滝 陽)

比較文化学科2年 高松 翼

私は8月6日(土)の相談会に参加しました。オープンキャンパスのスタッフは初めての経験で、はじめはとても緊張していました。大学生活についてどんな風に説明しようか、会場までどんな風に足を運んでもらおうかと悩んでいました。オープンキャンパス自体にはたくさんの方が来場し、体験授業や、学部紹介をはじめとする様々なイベントに参加していたのですが、私たちが担当する相談会の場所にまで足を運んでくれる人は多くありませんでした。私は、教室の外に出て友人と呼びこみや宣伝を行っていたのですが、その時に声をかけた方から「何を聞いたらいいかかわからない」「相談って言っても、そもそも何を相談していいかわからない」と言われました。それはとても大事なことで、とても反省させられる点でもありました。最初は、在学生が質問に答えますというスタンスだったのですが、小滝先生に相談したところ、翌日の相談会では、むしろ在学生の側から大学生活のポイントを伝えます、聞いてくださいというようなスタンスに変わったそうです。これが結果的にうまくいったという話を聞いて、とてもよかったです。

私が実際にお話しした方は3組ほどですが、中には高校一年生や、遠方から足を運んでくれた方もいて驚きました。私が相談時に話したのは、大学での生活の具体的な様子や比較文化学科で何を学べるのか、将来どういう道があるのかといったことです。しかし、自分自身2年生ということもあり、詳しく話せることも少なく大学への知識のなさを痛感することもありました。それでも、不安や疑問が消え笑顔で帰っていく人を見るとやってよかったと思います。

オープンキャンパスというのは大学選びのためのとても重要な機会です。私の言葉でこの学校を選んでくれる可能性があるかもしれないと思うと、少しプレッシャーも感じました。ですが、実際に相談を受ける中で発見があり、改善点などを考えていけたことは貴重な経験になったと思います。



比較文化学科2年 市川 麻衣

今回、初めて学生相談会に参加し、最初はとても緊張しました。自分が何を学んでいるか、どのような大学生活を送っているかをしっかりと考えたことがなかったので、来てくださった方に十分な受け答えができるだろうか、何を質問したら良いかわからない相談者に、自分からリードして話せるだろうかなど、不安だったのです。

一方、私とペアを組んだ4年生の相談者への対応を見ると、自然で落ち着いており、話の中身も明確で分かりやすかったのが、私は彼女の真似をしようと思いたちました。実際、先輩の言動から学べることはとても多かったです。自分は彼女に比べ、早口、かつ慌てているような口調で、「えー」「あー」が間に挟まることが多く、あまり格好が良くないのだと気づきました。なぜそんなに上手に受け答えできるのか先輩に理由を聞いてみたところ、就活で学

んだとのことで、喋り方にはいくつかポイントがあるのだと教えてくれました。結論から先に言う。要点を短くまとめる。言葉にすれば簡単なことでしたが、何よりも、そうした話し方をする社会人が多くいる環境に自分の身を置くことで、身についたといいます。自分を変えるのは環境であり、環境の中から成長のきっかけを得ることが大切なのだ実感しました。

振り返ってみると、私にとって今回の相談会は、同じ学部の人たちと知り合う場でした。普段、4年生と接する機会がほとんどない中、貴重なお話を合間に聞くことができたことは、自分にとって本当に良い経験でした。対面授業では同学年と接する機会が多いため、縦のつながりは貴重です。また、英語文化学科とも同じブースで相談会を行っていたので、そちらの先生や学生と接する機会もありました。オンライン授業では他学科の学生との交流機会はほとんどなく、先生の顔も分からないまま受講していたので、直接お話し出来たことは本当に良い機会になりました。また、普段授業のみでしか接点がない先生方とも、授業に関することや夏休みをどう過ごすべきかなど、滅多にないお話を機会を得られてとても嬉しかったです。

今回の相談会では、今まで気にしていなかった大学生活や自分の言動、身の回りの環境にしっかり向き合うことができ、自分の大学生活がどのようなものか、日々何を学び成長しているのかを再確認することができました。一方で、自分に足りないもの、身につけるべきものに気づく機会にもなりました。いずれ就活を控える中で、一歩前進できたように感じています。



学生相談会



模擬授業

学生の作品コーナー

今号では、教員から比較文化学科の学生にお願いして、色々なジャンルの文章を寄稿してもらうコーナーを設けました。原稿の種類は作品評・エッセイなど様々ですが、学生の皆さんの興味・関心・個性がよく表れた力作が集まりました。

『学科通信』の次号（来年3月発行予定）にも、ぜひ皆さんから「作品」を寄稿してもらいたいと思っています。ジャンルは何でもかまいません。書評・エッセイなど散文なら800～1200字くらい、詩であればもっと短いもの（短歌や俳句など）でもいいと思います。何か書いてみたい／多くの人に読んでもらいたいと思った方は、手近な比較文化学科の教員にその旨を伝えてください。締め切りは来年2月半ばを考えています。

（本学科教員 小滝 陽）

「作品」投稿希望の連絡先：ykotaki@kanto-gakuin.ac.jp

書評

ルイザ・メイ・オルコット（宮脇紀雄訳）『若草物語』 （ポプラ社文庫、1979年刊）

比較文化学科1年 鈴木 結蘭

今から約150年前に出版された、南北戦争の時代の物語。原題は『Little Women』で、2020年には『ストーリー・オブ・マイライフ／わたしの若草物語』として映画化された。第92回米アカデミー賞で6部門にノミネートされ、衣装デザイン賞を受賞した。

この本の著者である、ルイザ・メイ・オルコットは、1832年にアメリカのジャーマン・タウンで生まれた。やがて父親の仕事の影響で、ヒルサイドに引っ越すことになる。この、ヒルサイドに引っ越してから、著者の少女時代の体験をもとに、この本が書かれた。著者は4姉妹の次女で、貧しい生活を送っていたため、仕事をしながら執筆活動を続けていた。そして、『若草物語』がベストセラーとなり、さらに続編を出版し、著者の家族は、安定した生活を送ることができるようになった。美人でおしとやかな長女。著者自身がモデルの次女。恥ずかしがり屋の3女。世渡り上手な4女。この本は、それぞれ性格の異なる4姉妹が主人公の、自伝的小説。1861年に南北戦争が始まると、父親は布教師として戦場に行ってしまう。そんな家族のクリスマスの1日から、この物語は始まる。

皆さんが目指す人間像はどのようなものだろうか。この本は、個性豊かな4姉妹の短所と長所が、現実的な表現で描かれているので、共感または尊敬できる登場人物を見つけて、物語を読み進めることができる。短所は主に、たくさんの姉妹喧嘩のなかで描写されている。例えば、4女が次女の書いた原稿を燃やしたため喧嘩をし、4女が溺れた。この時次女は、自分自身の癩癩持ちが原因で妹を殺しかけたと、自身のした行動を後悔し、性格を見つめ直す。癩癩持ちであるという短所を持つ次女には、人のために行動することができるという長所がある。戦場にいる父親が危篤状態に陥った時、自身の宝物である髪の毛を売って、母親が父親に会いに行くための交通費にした。このように、人のために宝物を売ることができる次女の優しさを、私は尊敬する。

4姉妹は父親から、キリスト教的な博愛の精神を教え込まれていた。そのため、1話では、クリスマスの朝、自分たちもとてもお腹が空いているのに、近くに住む気の毒な家族に朝食をあげた。また、自分たちへのクリスマスプレゼントを買う代わりに、母親にそれぞれサプライズでプレゼントを買った。このように、どんなに困難な時でも、希望を捨てずに明るく振舞い、他人を思いやって行動する4姉妹から、この物語を通してたくさんの学びを得ることができる。

美しすぎる嘘と愛

比較文化学科4年 翁 家綺

宝塚歌劇という夢の世界に出ってしまったその日から、私の人生は愛に満ちあふれた。全くもって大げさではない。しかし、その夢は大きな嘘によって成り立っている。

歌劇団に所属している生徒、女性だけで表現される世界。「娘役」「男役」としての美しさに、魅了されてしまう。特に、現実の男性よりもカッコいいと思ってしまう「男役の美学」は、美しすぎる嘘である。

嘘によって成り立っているその世界にいられるのにも、期限がある。いつかは訪れる退団。でも、最後の1秒まで、その世界から大きな愛を届けてくれる…。毎年春には新しい入団者がいて、そうして108年もの間、守られ続けた夢。

私が特に愛してやまないのは、男役の黒燕尾である。「男役の美学」が全てつまっている。黒燕尾が似合う人しか好きになれない、と思ってしまうくらいの衝撃だ。宝塚歌劇は芝居とレビューのどちらも最高に素晴らしいが、一度黒燕尾の魅力に取り憑かれてしまったら、現実をみれるようになるまで、かなりの時間を要する。

美しく、優雅な世界…。だからか、敷居が高いとよく言われる。そしてベルばらのような世界観のイメージも強いのだが、実は席を選ばなければチケット代は安いし、なんと現在、宙組（そらぐみ）公演『HiGH&LOW -THE PREQUEL-』『Capricciosa』が絶賛公演中だ。芝居とショーの2本立て公演で、あのLDHと宝



塚歌劇の奇跡のコラボレーションが実現されている。

美しくもカッコいい『HiGH&LOW』の世界観を舞台で表現し、その後のショーでは「本当にさっきと同じ人？」と疑問を抱いてしまうようなイタリアの伊達男に惚れるだろう。そして終演後には、テーマ曲が頭から離れなくなっている。

私だって、最初は1回だけ観る予定だった。もう1回この公演がみたい、次の組の公演も2回、次は4回、その次は5回、その次は13回…。累計ではない。1つの公演を観劇した回数である。違う組の公演が重なって週7で宝塚の公演、33日間に19公演観るなんてこともあった。こんなに行けるのは時間のある大学生である今のうちだけだから、という想いもあるが、「チケットがあるなら行く」という思考になった

のは、そこがあまりにも幸せな空間だからである。

宙組の東京公演は10/15～11/20です。ご興味がある方はぜひ劇場に足をお運びください。新人公演（10/27）と大千秋楽（11/20）には配信もあります。私と一緒に夢の世界に浸りませんか？



留学体験

コロナ禍によって国際交流・留学プログラムがなお大きな影響を受けているが、活動が再開しつつあります。外国からの留学生を受け入れる一方、8月以後、比較文化学科では3名の学生が韓国、台湾に留学することになりました。今回は、中国の常州大学からダブルディグリー留学制度を利用して、4月に関東学院大学に留学しに来た学生に経験を書いてもらいました。

(本学科教員 鄧 捷)

私のダブルディグリー留学

中国常州大学・関東学院大学比較文化学科3年 付 効羽

私が日本語に関心を持ったのは、「名探偵コナン」の日本語版を観て、中国語と英語以外に、自分が受け入れて違和感のない言語があることを発見したのが始まりです。こうした日本語への興味から、日本のドラマやバラエティー番組をたくさん見ました。日本語が耳に心地よだけでなく、日本の文化がとても面白く感じられ、いつか日本に行ってみたく思うようになったのです。大学入試の願書を書くとき、同級生の多くは他人の意見を参考に専攻を記入していましたし、私自身も当時はまだ将来への思いが漠然としていましたが、直感的に「自分が興味のある専攻を選ばなければならない」と思い、迷わず日本語学科を選びました。2年間大学で体系的に勉強した結果、日本語は本当に好きで勉強できる専攻だとわかり、さらにしっかり勉強しようという気になりました。



外国語学習者としては、現地に行って現地の人の発音を聞くことが大切だと思います。話し言葉が書き言葉のような堅苦しいものにならないように、一日も早く日本に行きたいと思っていました。私が所属している常州大学は関東学院大学との間にダブルディグリー留学制度があると知って、それに参加するためにずっと頑張っていました。

ダブルディグリー留学は簡単に言えば、常州大学で2年間、関東学院大学で2年間、の学業を修め、両校の学位を取って卒業する制度です。なぜこのプログラムを選んだかという、日本に来て短期間の滞在だけでは、日本を深く知り、自分を向上させることは難しいと思ったからです。ダブルディグリープログラムは時間が長い留学プログラムです。文化人類学のフィールドワークの場合に倣っていえば、ある国を知るためには、最低でも1年間は現地一人で通訳者なしで滞在しなければ、その国のローカルな部分を知ったとは言えないのです。私は、自分の勉強のプロセスを、文化人類学者のフィールドワークに例えて考えています。留学中に言葉や文化だけでなく、それ以外の勉強や体験ができればさらに素晴らしいことと思って、ダブルディグリー留学を決心しました。

私は、さまざまな生活様式や異なる文化的慣習を学ぶのが好きです。強い好奇心から、比較文化学科を選びました。比較文化学科では、学ぶ範囲が広く、自分を高めるために好奇心をより生かすことができると考えています。比較文化学科の勉強を通して、自信をつけ、視野を広げ、自分を高めたいと考えています。

語学検定結果報告

中国語 HSK 資格試験の受験結果報告

本学科教員 鄧 捷

昨年度学期末の2月に中国語 HSK 資格試験対策講座に参加した学生は3月26日にそれぞれのレベルに応じて受験しました。講座参加者16名（比較15人、現代社会1人）は、コロナによる欠席者2名を除けば、受験した14名（2年生1人、1年生13人）が全員合格し、そのうち、5級は1名、3級は2名、2級は11名の合格でした。対策講座に参加した学生はほとんど1年生であり、1年間

中国語を学んで、大きな自信を手に入れたのです。その後、3級に合格した学生がさらに勉強を重ねて、夏休み前に4級に挑戦して、見事に合格したことも報告されています。

中国語を含めた語学検定の講座や受験について、比較文化学科ではほとんどの費用を負担しております。今年度も中国語・韓国語の資格受験対策講座があり、多くの参加者をお待ちしています。



比較文化学科通信 Vol.35

2022年10月3日発行

編集：関東学院大学国際文化学部比較文化学科

編集協力：関東学院大学国際文化学部比較文化学科ゼミナール連合会

〒236-8502 横浜市金沢区釜利谷3-22-1 TEL:045(786)7179 URL:<http://kokusai.kanto-gakuin.ac.jp/>

印刷所：株式会社なまためプリント 〒231-0006 横浜市中区南仲通4-43馬車道大津ビル TEL:045(641)8080